



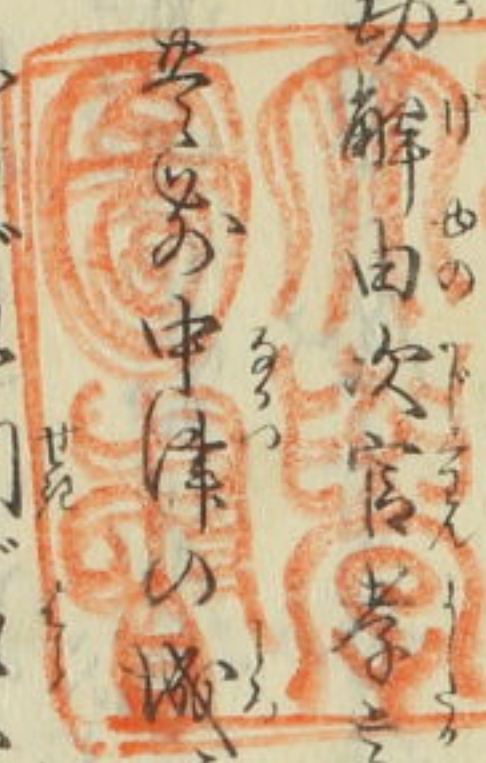
9
3780
4

3780
4

三省録附言上

軒の志ろふ

志賀忍輔



○愚田幼解由次官等入る如水利新築長九年三月廿四日卒ス六十
九才其子中津の海にて終る子息甲斐守長政ハ
神君小あふは関が原小赴くが城中人救不足をいひそだせし
拘んとくを必觸ききし法治人を免しを免しやあるまに
時日な移さるる勢の川をる貝原市吉街杉原一葉おれ水の下知
小あふは其の金銀を以て廣く積む地集あふ人おれ水の
換へ彼數百人の中小二重に金子を清みそののりやまけ人
とをなるとめと告ぐ如水利日今度當家の先をたけ
繪を突んたりふふのか何ぞおれ振のさしに振おてんや

○むいーいさのそのもさる軍勢本まへ取持するはやあつる

- 一 あも百ふに四枚
- 一 むしろ同部枚
- 一 るうはひにタロ古下七百ふ拾又
- 一 松板あ部拾ふ枚
- 一 るうー一足三拾部又
- 一 ちりし油 大武百に拾部又 中百七拾部又 八拾部又
- 一 ちりしこま 八拾又と拾又
- 一 やう落く部拾八又
- 一 ふちる部新 八拾又
- 一 かりんじん 二拾又

金一法拘のつりひ下連ねるこりてさ備板のづうあま
あやうり當時法名の連ねる中へうあまうり勿漏し以次
水藩の松山氏より安ふ辰年四月十八日付同月二日より
天保元寅年まで 水府の
河内列者ある東叡山中若洋院が江戸へ水戸占下りし
時刻の賄利法名お連ねる中へうあまうり勿漏し以次
たうさ連ねる中へうあまうり勿漏し以次
こと武家軍用のい掛あまうり更ことさうあま

- 一 酒み棒 吉年、月 代目拾又
- 一 豆腐 七拾又挺 吉年、月 代目又
- 一 あんあや 六拾挺 同月 代目又

一 出づ	三拾把	代ハ又七ト
一 鼓	百四拾又	代五又九ト
一 せんぬ	八把	代即拾四又
一 蕨	三拾中	代九又即一ト
一 蕨	百把	拾把付 代四又八ト
一 里い	八株	代七又
一 うや	三拾把	拾把付 代四拾八又
一 呂和布		代四拾又
一 何うめ	五把	代三拾又
一 多し海苔	拾把	五把付 代七又
一 推茸	五株	五株付 代八拾又

一 とさうのり	即株	日付 代四拾又
一 かんむり	拾把	五把付 代拾七又
一 岩しけ	三株	五株付 代即拾又
一 枸杞		代拾又
一 うあな		代拾又
一 松露		代即拾又
一 生薑	五株又合	五株付 代三拾又
一 けー	又合	五株付 代九又
一 ころー	五株	代七拾又
一 菓子	四株	代即百又
一 公はー	又拾張	代四拾又

一 たる粉 代百四拾二文
 一 とうろふあうち 三挺 代拾六文
 一 志保 三挺 代九文
 一 らうとく 拾挺 代拾四文
 一 火ばし 五挺 代三拾文
 一 酒のかす 五挺 代拾五文
 一 小豆 五挺 代拾四文
 一 粟 五挺 代拾五文
 一 おさやう 三市 代八文
 一 貝志やう 五市 代四文
 一 うどんとば切 三度 代六百文

一 荏にらう 計肆文 代百二文
 一 庖丁人 日雇 代三拾五文

但 十月より十七日まで 日三二人
 十月より廿二日まで 日三一人

一 人員 日雇 代拾四文
 但 十月一日 三人

惣 金部
 徳久貴二百文

以金をふりつゝ 徳久百文拾五文
 但 徳久をふり 九百四拾八文ノ差

右

仲多附四ヶ坊諸君多形之書
 少何人ノ持てゐるに引れをる小石之也

けんえん
 加 酒酢醬油並附
 帳治橋歩門前南角
 小樽屋新金倉

新諸白を律に付		古酒を律に付	
一 大坂上酒	代五拾貳文	一 大坂上酒	代六拾四文
一 西之入酒	同六拾貳文	一 西之入酒	同七拾貳文
一 西之入酒	同六拾四文	一 伴丹西之入酒	同八拾文
一 伴丹上酒	同七拾文	一 池田上酒	同百文
一 伴丹上酒	同八拾文	一 大樽上酒	同百拾文
一 山崎本酒	同九拾文	一 大樽上酒	同百拾貳文
一 樽上味淋酒	同百文	一 樽上味淋酒	同百拾文

酢醬油を律に付

同

一 大坂河内酒	代百八文	一 左京	代六拾四文
一 樽上味	同七拾八文	一 結城	同四拾貳文
一 近江酒	同七拾文	一 尾張酒	同四拾貳文
一 とうし	同六拾文	一 山崎酒	同四拾貳文

例自之無少新諸白を律に付
 沢山入新はる別るお改酒酢醬油并に信合中並に上
 中石限多少酒用と信付下はお揚言やうに
 重財之割合を以て中石入酒は持来を以て方極に
 只今迄之無代給るを酒用と中石入酒より遠
 之を酒用と改め給る事下は取上

月日

○又六年も山前^{りせん}さき法住人の身よりあまたいふ事あるに
き足も繫^{つな}ぎ中程もきいていし中知れ又百石以上なりてど
中^{なか}あしやえう腰^{こし}をき足もつかれた中振るあるに三百石をや
かうていふぬ平の口よりおちる清流をかたつとくやうと
あまの面々とも知りぬある名にやうにいけたる云々あり
侍に官をばすても言う楊枝磨に飢へる植をつまぬねむりや

その時代の世情を侍らうもの及びぬ事も武士のいふべきを
あつひ學ぶ如くあつてはまたも候令舞々曲々とも思はるべし
いふにこれに如く此各地合に序致とあるは是れ及む仕合を
物心の武士為に依りて件 武道初心抄

〇愚曰何人々々い赤野先祖に大坂の陳の以供やそのおとめが
 其時より中法に用を記や帳面ある中々小糠を平代
 又又とあり今より見ても識る所なり此車安に新あり
 うことくうちや同ふりやけと云ふれりしと落りてふ
 勘ふべかど遠別濱松の本陳杉浦助を馬り下藤ふむ十九
 年寅冬大坂の陳の以給虫のりしものうちと陳尻宿
 賢の次を人侵漁漁三よりを足ふ又但し陳尻自より新で

定家^{とくさけ}の^{とくさけ}小倉^{こくら}の^{とくさけ}式部^{しきぶ}毛利^{もうり}家の^{とくさけ}家士^{けし}藤田^{ふじの}氏の^{とくさけ}持^{もち}
て^{とくさけ}うむ^{とくさけ}一^{とくさけ}の^{とくさけ}影^{かげ}式部^{しきぶ}友古^{ともこ}むた^{とくさけ}うり^{とくさけ}の^{とくさけ}法^{はふ}大^{とくさけ}師^{とくさけ}
の^{とくさけ}氣^き經^{きやう}こ^{とくさけ}う^{とくさけ}成^{なり}る^{とくさけ}小^こあ^{とくさけ}き^{とくさけ}う^{とくさけ}る^{とくさけ}友^{とも}古^この^{とくさけ}う^{とくさけ}り^{とくさけ}小^こ藤^{ふじ}氏^し
あ^{とくさけ}る^{とくさけ}の^{とくさけ}き^きこ^{とくさけ}う^{とくさけ}る^{とくさけ}あ^{とくさけ}る^{とくさけ}古^こ白^{はく}家^けの^{とくさけ}底^{そこ}
と^{とくさけ}實^{じつ}朴^{はく}の^{とくさけ}有^あさ^{とくさけ}み^{とくさけ}る^{とくさけ}小^こき^{とくさけ}る^{とくさけ}

○神^{かん}君^{きみ}の^{とくさけ}教^{きやう}訓^{くん}佐^さ吉^{きち}の^{とくさけ}神^{かん}院^{いん}宣^{のり}家^け小^こ神^{かん}侍^しう^{とくさけ}、^{とくさけ}慈^じ悲^ひと^{とくさけ}神^{かん}神^{かん}
と^{とくさけ}家^け小^こ神^{かん}力^{りき}う^{とくさけ}、^{とくさけ}正^{せい}連^{れん}と^{とくさけ}神^{かん}力^{りき}と^{とくさけ}家^け小^こ神^{かん}み^みぬ^{とくさけ}、
智^ち急^{きふ}と^{とくさけ}神^{かん}み^みぬ^{とくさけ}と^{とくさけ}家^け小^こ特^{とく}ぬ^{とくさけ}、^{とくさけ}そ^{とくさけ}う^{とくさけ}と^{とくさけ}家^け特^{とく}ぬ^{とくさけ}、
家^け小^こ方^{はう}便^{べん}ぬ^{とくさけ}、^{とくさけ}柔^{じゆう}和^わと^{とくさけ}方^{はう}便^{べん}ぬ^{とくさけ}、
慈^じ悲^ひの^{とくさけ}目^め小^こ情^{じやう}や^{とくさけ}あ^{とくさけ}う^{とくさけ}る^{とくさけ}罪^{つみ}の^{とくさけ}あ^{とくさけ}る^{とくさけ}身^みに^{とくさけ}將^{まさ}不^ふ便^{べん}か^{とくさけ}、
神^{かん}君^{きみ}つ^{とくさけ}い^{とくさけ}づ^{とくさけ}稱^{しょう}と^{とくさけ}あ^{とくさけ}い^{とくさけ}す^{とくさけ}、^{とくさけ}惡^{あく}運^{うん}と^{とくさけ}私^し怨^{おん}う^{とくさけ}り^{とくさけ}あ^{とくさけ}天^{てん}下^かの^{とくさけ}乱^{らん}る

おにぎりより 起^{おこ}る^{とくさけ}と^{とくさけ}お^{とくさけ}訓^{くん}お^{とくさけ}に^{とくさけ}と^{とくさけ}と^{とくさけ}

○寛^{かん}平^{へい}の^{とくさけ}末^{まつ}年^{ねん}六^む月^{げつ}中^{ちゆう}旬^{しゆん}末^{まつ}尾^び主^{しゆ}水^{すい}正^{せい}夜^や辰^{ちん}分^{ぶん}今^{けふ}後^ご玉^{ぎよく}中^{ちゆう}馬^ば那^な池^ち
衆^{しゆ}ち^{とくさけ}の^{とくさけ}妙^{めう}の^{とくさけ}上^{じやう}書^{しよ}果^{くわ}も^{とくさけ}非^ひ人^{にん}女^{にょ}の^{とくさけ}并^{へい}發^{はつ}句^く
漸^{せん}去^そ非^ひ人^{にん}界^{かい}今^{けふ}日^{にち}昇^{しやう}上^{じやう}天^{てん}捨^{しや}破^は簾^{れん}破^は笠^{りふ}曉^{きやう}夢^む寺^し門^{もん}前^{ぜん}。
あ^{とくさけ}き^{とくさけ}あ^{とくさけ}る^{とくさけ}ぬ^{とくさけ}り^{とくさけ}た^{とくさけ}娘^{むすめ}の^{とくさけ}事^{こと}と^{とくさけ}え^{とくさけ}の^{とくさけ}裸^{はだか}の^{とくさけ}あ^{とくさけ}は^{とくさけ}身^みか^{とくさけ}と^{とくさけ}

あ^{とくさけ}い^{とくさけ}と^{とくさけ}ひ^{とくさけ}大^{だい}月^{げつ}、^{とくさけ}い^{とくさけ}く^{とくさけ}終^{しゆう}る^{とくさけ}か^{とくさけ}を^{とくさけ}ぬ^{とくさけ}の^{とくさけ}な^{とくさけ}。

○美^み作^{さく}の^{とくさけ}玉^{たま}の^{とくさけ}人^{にん}の^{とくさけ}り^{とくさけ}、^{とくさけ}清^{せい}人^{にん}と^{とくさけ}あ^{とくさけ}じ^{とくさけ}ず^{とくさけ}、^{とくさけ}い^{とくさけ}ら^{とくさけ}ひ^{とくさけ}ら^{とくさけ}破^はと^{とくさけ}身^みの^{とくさけ}り^{とくさけ}昇^{しやう}身^み
い^{とくさけ}ら^{とくさけ}う^{とくさけ}い^{とくさけ}り^{とくさけ}先^{せん}端^{たん}と^{とくさけ}け^{とくさけ}と^{とくさけ}ぬ^{とくさけ}。

実^{じつ}の^{とくさけ}や^{とくさけ}ど^{とくさけ}橋^{はし}と^{とくさけ}み^{とくさけ}ら^{とくさけ}人^{にん}と^{とくさけ}た^{とくさけ}た^{とくさけ}お^{とくさけ}り^{とくさけ}ぬ^{とくさけ}ほ^{とくさけ}や^{とくさけ}ら^{とくさけ}あ^{とくさけ}り^{とくさけ}と^{とくさけ}、
右^{みぎ}三^{さん}々^{さん}々^{さん}理^り角^{かく}が^{とくさけ}な^{とくさけ}信^{しん}色^{しき}成^{なり}り^{とくさけ}り^{とくさけ}、^{とくさけ}橋^{はし}と^{とくさけ}く^{とくさけ}ま^{とくさけ}ぬ^{とくさけ}三^{さん}貴^き院^{いん}か
い^{とくさけ}づ^{とくさけ}い^{とくさけ}ら^{とくさけ}う^{とくさけ}り^{とくさけ}と^{とくさけ}書^{しよ}を^{とくさけ}か^{とくさけ}つ^{とくさけ}と^{とくさけ}ら^{とくさけ}う^{とくさけ}ま^{とくさけ}な^{とくさけ}と^{とくさけ}い^{とくさけ}ら^{とくさけ}い^{とくさけ}ら^{とくさけ}か

岸より葦一面を志づりて一服をすそから内河の如く
繁華を成すと云 同上

理多日加納炭の赤瓦小泉十番隠居し一軒石原に
るを小居より一か又此のちをその以予小居より一か
が六仙母が整りの出るすで々時後々浅川の釣者一
番宿す家その稀ありて是れ娘など出たり一日
を如く浅川を遊ばずば一佛にたまりてありて
中を遊ばずしむるをねむる朴素のりて或は炭の奥に
より銀の算帳を本編りてをきけらしは結構なるを
いふにありて一人ありていふる来るるを彼大依
母がはねてしめて語る今度天保元年より

○群

百七十七の道の有指うづ一本又と合をる
群とてふのよりいふにを群影し用ひ炭の油と刻
竹と音の法本小依居の油紙一生すも付る人多く
付る人も整のよりすも月代を立といふ毛のすつ
人が一け付るに依り依居のりやうを賣るを湯桶
小一軒親町小一軒取置を替む一やう一軒半の値を
一軒取置戸中小一軒取置を賣るを賣るを賣る小の川
一軒一軒の一見も今のやう大なる見やあるが同業見
の見小一軒を賣る人右目とすは群の見一語るを
自に付切るもありて二年三年に付切るものも
依居の油を付る人々笑ひてしめては群のありて

本多信房もあまに合はれず、たゞてゝも、
大場庵やうけつた、次の女中も多うり、
きつ、四月、
あつたの様子を止めて、信房が、
か、
おと人のや、
る、
ふ、
と、
い、
わ、

か、
ゆ、
政、
外、
源、
さ、
源、
付、
故、
か、
も、

と云はれ織田氏のおびきつゝひりー家の火より焚きしと云
何れも古代の有根おひきつゝひりー

○何れも秀吉曰病成治する三味の妙業

天をわたりて 成を成る 俵成ちる

禁拘四味

私をかり 邪欲をさひ 拘小意を 邪義をひく

右四味をさひて三味を用ひて病を治す

○品川第の書物も成るやうなる書物も人々を連れ書物も
いふやうの書物も人々を連れ書物を指改之なるものなり
そは法座の書物も書物も書物を指改之なるものなり
かゝる書物も人々を連れ書物も書物を指改之なるものなり

集りて住るきし海にわたりて殊の節意口住るや内住者の
元大勢もや来り番人おれをさるる指を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり

寛永小説

○神組の住小書物も書物も書物を指改之なるものなり
元大勢もや来り番人おれをさるる指を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり
元捕まひて書物も書物も書物を指改之なるものなり

このうぬを止るより主格式さう略すもまたお修
教坊の猥行なうなりぬきい善道し大人忍子のなり
略い剣道かゝ貧乏賊子のなり略い却ゝ家を破る
娘をさうなるあゝゝ動略す時を要飲のいゝ福安
さうねさ主格式のいゝゝ動略の筋いゝさゝ井伊
代々質素かゝ修り侍もなり中へ動略し武備
嚴重か古兒を改むなりなりかゝるさうさうの仕
小依りあるより久遠し柿掃部以て長根へ移り
是れ半今といふ有切なり男掃部以て疎をすけり
多時の罪人なり禁かゝるに記すの略し今度大更
の後大更の娘なり殿のへ移り思ふことなり知りし

きゝ在玉のあし下武備場敷の老切のさめなり
より今日を晴しと立連なりなり掃部以て本家の因
服因給なり紙をく用なり掃部もなりなりお土物
うさゝかみれなりなりなりなりなりなりなりなり
しゝゝかゝる成慶のさめなりなりなりなりなりなり
かゝるゝさめなりなりなりなりなりなりなりなり
をさうりひゝゝのさめなりなりなりなりなりなり
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
えんきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○本庄岡崎と赤松朝臣昇身して侍従小任に當るの君小
 村とて是の時より奔走して門下と市況なり
 烟のりとも茶候なりといふは情厚なりといふ毎日朝
 食のち婦人命とて焚火と碗と必婦人共給せり
 婦人々々其なりといふ昔日わが家も天にむくこ
 とて目こに教誡ありて居間小鐵の板又獨りかゝる
 長押と懸垂する二本入の扇子箱よりかき出さるはる色
 々々様々といふ人の同くさういふ活なりといふは案外
 下りさるゝといふ内意ありてまづ二本入の扇子箱を二條
 家の家上持来しと映るるを記し謝儀とせしむるに
 中敷よりいふ扇子を買んとす小懐中へ入指儀ありて

はせびそきて買ねんやと云ふはわが知りてさう價ひの
 所は不及も扇子いふは程も用立てんといふ持あつた
 けとて其束の感光かゝるものなりといふは今かく
 の如くさうさうは誠の扇のといふものなりといふやう
 なものなりといふなりといふはさういふは思ふ
 そむき自らの素もいふなりはさういふは思ふ
 まづ死して掛るゝと云ふはさういふは思ふ
 ○市旗本の赤松むらゝ長をいふは侍従の腰をさ
 る侍の侍同志より合中より中よりさういふは思ふ
 すゝめ侍の意外に合中よりさういふは思ふ
 市旗本のさういふは思ふ

竊にみゆ一後東の所見可帝のつひにふし
うう御出を集をすたぬ一經典書寫の新や
後ふたれより一公家の新家とわうふの家を病家
水子家とも片子家ともなれたけらあともあつたや
天工用物ともす還魂家とすたぬはるやういふ

三省録附言上終



